























































































十子 お兄ちゃんは!?..

一彦 着替えてんだろ?

十子 いないのよ! 逃げたわね。

村松 恵五郎さん、乗り気じゃなさそうでしたよね……。

十子 写真を見れば気が変わるわよ。

十子、見合い写真を開いて見せる。

その場の四人、写真を覗き込む。

とみ、そして一彦の顔色が変わる。

一彦 ……嘘だろ?

十子 樋口八重さん。ね? そっくりでしょう? 静子お義姉さんに。

一彦 おばちゃんの親戚?

とみ いいえ……。

十子 こんないいご縁、二度とありっこないんだから。お兄ちゃんには、首に縄をつけてでも会ってもらいますからね!

九里子 (箒を片付け) あたし、これで失礼します……。

十子 お留守番ありがとう。九里ちゃんにも今度、いい縁談があつたら紹介してあげるわね。

一彦 迷惑だよなあ? 九里ちゃん。

九里子 お邪魔しました……。

村松 (帰っていく九里子に) 九里子さん! 長嶋になにを言われても、気にしちゃダメですよ!

一彦 なに? 長嶋って。

村松 なんでもありませんけど……。

喜助 ただいま! ……九里子さん、どうしたの? 寂しそう。

九里子 さようなら、喜助さん…… (退場)

喜助 さようならー！

とみ (喜助に) 幹ちゃんは？

喜助 恵ちゃんと銭湯に行っちゃった。

十子 もう！ お兄ちゃんてばー！ (奥へ行きながら) 一彦！ とつとつ着

替えなさい！ 皺になっちゃうでしょ！

一彦 俺に八つ当たりするなよ。(と奥へ)

喜助 (にこにこ) トコちゃん、こわーい。

とみ ねえ、喜助さん。ちよつとこれ見てください。(と写真を見せる)

喜助 だあれ？

とみ 恵五郎さんのね、お嫁さんになるかもしれない人。

喜助 ふーん。

とみ ……誰かに似ていると思います？

喜助 ……わかんない！

とみ そう……。

喜助 静子さん、元気？

とみ え？

喜助 静子さん、元気かなあ。

とみ ……多分ね、今はもう。遠い所で元気になっていると思いますよ。

喜助 よかった。静子さんの煮物、おいしいね。時々くれたの、とってもお

いしかった。

とみ うちにカボチャを煮たのがありますけど、喜助さん、召し上がる？

喜助 はい！

とみ じゃあ、ちよつと寄っていつてくださいな。(村松に) みんなによるし

く言ってくださいね。

村松 はい。

喜助 もやしさん、さようなら。

村松 ……ユキオですよ。

喜助 ん？

村松 いえ……。さよなら、喜助さん。

喜助 さようなら！

とみと喜助、帰っていく。

一人残された村松、アルバムを出してきて、見合い写真と見比べる。  
そこへ電話が鳴る。

村松 (出て) 泉商店です。……あ……。どうしてここが……。ええ、ちやんと食べていますし、体はなんとも。……わかりました。わかったから、もう掛けてこないで。……こっちから必ず、うん……。わかってるよ、お母さん……。大丈夫ですから……。

十子が茶の間に入ってくる。

村松 (慌てて) それでは！(と電話を切り) 間違い電話でした！

と、取りつくろうやいなや、さらにあたふたとアルバムや見合い写真を片づけ始める。

そんな村松を不思議そうに十子が見つめる中、暗転。

## 五

泉家の茶の間。

とみが幹太のズボンに継ぎあてをしている。

一彦は電話で話をしている。

一彦 わかりました。そう伝えておきます。それじゃ。(切る)

とみ 注文？

一彦 ずいぶん買い叩かれてるみたいだな。機械で大量生産されたもやしが安く出回るようになったからね。

とみ スーパーマーケットなんていう大きなお店も増えているし、小さいところはこれからどこも厳しいんでしょね。

一彦 泉商店も、いつまでもつことやら。

とみ ……就職、まだ決まらないの？

一彦 返事待ち。多分、ダメじゃない？

とみ そんなのんきなこと言って。少しは恵五郎さんの力になってあげなきゃ。

一彦 兄ちゃん、どうなったかな。

とみ ……一彦君もついていたらよかったのに。

一彦 俺が見合いするわけじゃないもん。

とみ お義姉さんになるかもしれない人よ？

一彦 俺の予想では、兄ちゃんはきつと……。

とみ ……なあに？

一彦 寝てるね。

とみ まさか。

一彦 絶対寝てる。十分以上目を開けて座ってられっこないよ。なにしろ兄ちゃんの尻にはスイッチがついてんだから。

とみ スイッチって？

一彦 あれ？ 幹太は？

とみ 九里子さんのところよ。喜助さんに作ってもらった竹とんぼ見せるんだって。

一彦 なんだよ、俺には見せてくんないのかよ。

とみ ……本当はね、九里子さんみたいな人が、恵五郎さんのお嫁さんになつてくれるといいなって思っていたんだけど……。

一彦 ……あの人、気にいらない？

とみ ……あんなに似ているとね、なんだか、静子が生きていたことが、嘘のようになってしまふ気がして……。

一彦 幹太、憶えてないだろうからな。

とみ ……。一彦君、最近、写真機いじってないのね。

一彦 ん？ ああ。

とみ ちょっと前までは、近所をぶらぶらしながらよく写真撮っていたのに。

一彦 おもしろかったからね。世の中がどんどん変わっていくのが。

とみ 今は？ 飽きちゃった？

一彦 変わってく早さについていけなくなったのかな。今のうちにあれも撮っておかなきゃ、これも撮っておかなきゃって、焦っちゃってさ。

とみ でも、そうやって撮っておけば、あとで貴重な写真として残るでしょうに。

一彦 それもねえ。なんか、形見集めてるみたいでさ。楽しくないのよ。

とみ そう……。

一彦 現像代もおっつかないしね。そう言えば、まだフィルム残ってたかもな。(と奥へ)

歌声とともに喜助が現れる。

喜助 おーもえば ゆーめか とーきの間にー 五十三次ー はーしりきて

ー 神戸のやーどに 身ーをおくもー ひーとにつーばさの 汽ー車の恩

ー。とみさん、お鍋返しに来ました。

とみ あらまあ、わざわざすみません。

喜助 お家、留守だったから。

とみ お口に合いましたか？

喜助 とってもおいしかった。静子さんとおんなじね。

とみ 私が教えたんですもの。私がいなくなった後でも、困ることがないよ うにって。

喜助 じゃあ、静子さん、困ってないね。

とみ ……そうだといいんですけどね。親よりも先にいつてしまつて……。  
できることなら、代わつてやりたかつたんですけど……。

喜助 代わつてあげるよ。

とみ え？

喜助 いつかユキオとね、代わつてあげるんだよ。もう食べ物がたくさんあるからね。恵ちゃんもやしをくれるから。

とみ ……そうですか。喜助さん……そうでしたか。

一彦 (カメラを手に戻つてきて) あ！ 喜助さん、ちょうどよかった。写真撮つてあげるよ。

喜助 はい！

喜助、その場で直立不動。

一彦 そんなに硬くなんなくてもいいんだけど。

喜助 (力みに力みながら) まだ？

一彦 もつところ、ポーズをつけたりさ。

喜助 一ちゃん、まだ？

とみ 早くしてあげたら？ 大変そうだから。

一彦 はい、じゃあチーズ。(シャッターを切る)

喜助 (大きくほーつとため息をつき) 面白かった！

一彦 ええっ？ そうだった？ じゃ、おばちゃんも一枚……と、残念！

今ので最後だ。

そこへワンピース姿の十子がどかどかと帰ってくる。

十子 ちよつと、佐々木のおかあさん聞いてよ！ お兄ちゃんたらひどいの

よ！ お見合いのあいだ中、ずーっと居眠りしてたんだから！

一彦 (とみに) ほらね？

十子 お仲間さん、呆れて口開けてたわよ！

背広姿の恵五郎が入ってくる。

恵五郎 あれが普段通りの俺なんだからしようがないじゃないか。

十子 普段通りにもほどがあるでしょ？

恵五郎 がんばっていろいろ話したつもりだけどなあ。

十子 お見合いの席で「戦後にもやし屋がひろまった理由」なんて語り出す人がどこにいるのよ！ この調子でたまに目を開けても、もやしの話ばかり！

恵五郎 結構、興味深そうに聞いてなかったか？ なんだっけ……田淵さん？

十子 樋口さんでしょ！ もうやだ！ あたし、お兄ちゃんと縁切りたい！

恵五郎 まあ、そう心配しなくても、おまえは直に泉家じきの人間じゃなくなるんだから。

十子 博さんが出世できなかつたら、お兄ちゃんのせいだからね！

一彦 結局そっちの心配かよ。

恵五郎 博さんには、あとで俺からも謝っておくよ。

とみ じゃあ……今回はダメだったの？

十子 当たり前じゃない！ もう、お兄ちゃんの馬鹿！ これで博さんとも気まづくなつたらどうしてくれるの？

喜助 トコちゃん、お洋服きれい。

十子 ありがとう喜助さん。この日のためにね、一生懸命縫ったの。

一彦 最後はおばちゃんがね。

十子 うるさい一彦！ 就職決まったの？！

一彦 もー、馬鹿のひとつ覚えみたい……。

十子 馬鹿はお兄ちゃんなの！

とみ まあまあ十子ちゃん、こういうことはご縁だから……。

十子 お兄ちゃんなんて、もやしと結婚すればいいのよ！

恵五郎 はいはい。じゃあお嫁さんの顔でも見てくるかな。

十子 なによー！ さっきまでグーグー寝てたくせにー！

恵五郎が小屋に入っついでいこうとすると、中から村松が飛び出して来る。

村松 ああ！ 大変です！

恵五郎 どうしたの？

村松 もやしが腐ってるんです！

恵五郎 どのもやし!?

喜助 大変だ！

村松と恵五郎、続いて喜助も小屋の中へ。

十子 居眠りしたバチが当たったのよ。

とみ これ、いけませんよ。

一彦 俺、フィルム出してこようかな。（と庭に下り、ふと外の方を見て）

あれ？ 九里ちゃん、なにしてるの？ あがっておいでよ！

椎茸の載った箆を手にも、九里子がこそこそと現れる。

九里子 あの……田舎から椎茸をたくさん送ってきたものですから……。幹

太君に持って行ってもらおうとしたら、お友達と遊びに行っちゃって……

……。

一彦 いつも悪いねえ。

十子 ちよつと九里ちゃん、聞いてよ！

一彦 （うんざりと）えー、また最初からー？

十子 お兄ちゃんは結婚しない、一彦は就職しないじゃ、あたしお嫁に行けないわ！

一彦 嘘つけ。這ってでも行くくせに。

九里子 今日、恵五郎さん、お見合いの……。

とみ ダメだったらしいのよ。もやしの話ばかりしていて。

十子 ほとんど居眠りしてたのよ!! 信じられる？

九里子 それはもう、あっさり信じられますけど……それで、恵五郎さんは？

十子 今、縁結びの神様の罰を受けてるわ。

とみ 十子ちゃん！

一彦 (九里子に) もやしが腐っちゃったみたいでさ。

九里子 ええっ！

小屋の中から、恵五郎、喜助、がっくり肩を落した村松が出てくる。

喜助 よかったね。ちよつとだけだったね。

村松 すみません。きつと水の温度が高すぎたんです……。

恵五郎 気にすることないよ。あれぐらいならよくあるんだ。下の方はね、どうしても熱がこもっちゃうから。

村松 僕の不注意です……。

恵五郎 いや、むしろよく気がついてくれたよ。放っておいたら四日目のもやしが全滅するところだった。

村松 いたら誰だつてわかります。すごい臭いでしたから……。

恵五郎 それでもさ。

喜助 もやしさん、お手柄、お手柄。

十子 村松さん！ 聞いて！

一彦 聞かなくていいよ、村松さん。

十子 一彦も来ればよかったのよ！ そうしたらあたしがどれだけ恥をかい  
たかわかるから！

恵五郎 まだその話か……。

村松 そう言えば、お見合いは……。

恵五郎 うん、嫌われたらしい。

十子 嫌われるようなことをするからでしょう!!

とみ 十子ちゃん、いいかげん落ちついて。

村松 本当にすみませんでした。こんな大事な日に……。

恵五郎 いいからいいから。

喜助 九里子さん、こんにちは。

九里子 こんにちは。幹太君の竹とんぼ見ましたよ。喜助さん、手先が器用

なんですね。

一彦 (恵五郎に) 権茸もらったよ。

恵五郎 ああ、いつもありがとう。

喜助 (村松に) もやしさん、大丈夫? 元気出して。

恵五郎 ほんとだよ? あんなの失敗のうちにはいないから。

喜助 (ポケットからくしゃくしゃのハンカチを村松に差し出し) はい。

村松 (丁寧に戻させ) 泣いてませんから。

とみ 真面目な方なのね、村松さんは。

十子 いっそ村松さんお見合いしない? 誠実な人なら誰でもいいらしいから。

村松 僕は誠実な人なんかじゃありませんよ。

十子 あら、そうかしら。

村松 ……つまらない嘘もつくし。

とみ 村松さんはきちんとしていい方ですよ。

九里子 そうですよ。

村松 ……こちらのみなさんは……やさしいですね。

一彦 それは勘違いだよ。さっきの姉ちゃんの怒りよう、見たでしょ?

村松 僕は今まで、ミスをした時に……。

恵五郎 ミスなんかじゃないよ。事故みたいなものだ。

村松 ……こんなふうには、慰められたことなんてなかったですよ。

十子 意外ねえ。ちやほやしてくれる人が周りにたくさんいたんじゃないの？

村松 いましたよ……。そんな人しかいませんでした。

とみ ご両親は？

村松 父は「俺が掟だ」という人ですし……。

九里子 お母様は？ 心配なさっていないんですか？

村松 ……心配しています。僕が、父の思い通りにならないことを。

一彦 なんだか息苦しそうだなあ。

村松 とにかく、僕のことをわかってくれる人間なんていないんです。

十子 あら、だめよ。そんな寂しいこと言っちゃあ。

九里子 そうですよ。村松さんをわかってくれる人は必ずいます！

とみ まだ出会っていないだけですよ。

喜助 会えなくてもね、どこかにいるよ、きっと。

一彦 それでも会えなかったらさ、「確かにいたんだよなあ、俺をわかってくれる人が。とうとう会えなかったけど」って思えばいいんじゃない？

恵五郎 そんなことより、自分がわかってあげるよって誰か名乗りをあげようよ。

十子 それもそうね。

一彦 じゃあ、村松さんのことをわかってあげる方、挙手をお願いします！

村松以外の全員、手を挙げる。

村松 (苦笑) ……ありがとうございます。

喜助 (村松に) よかったね。

十子 でも、なんで会社継ぐのがイヤなの？ わからないわあ。

一彦 姉ちゃん！ 満場一致が台無しだよ。

喜助 それじゃあ、行きます。

恵五郎 帰るの？ もやし持っていかない？

喜助 うん、いらぬ。

恵五郎 腐ってないやつだよ？

喜助 ありがとう。いい！

恵五郎 そう？

とみ それじゃ私も。(と立ちあがる)

一彦 あ！ 俺も。フィルム出しにいくんだ。ちょっと待ってて。

喜助 先に行く。

一彦 待っててよ。財布取って来るだけだからさ。

喜助 先に行くよ。とみさんも一ちゃんもね、あとからゆっくり来て？

とみ そうですか？

喜助 さようなら。

全員、口々に喜助に別れを告げる。

喜助は「鉄道唱歌」を歌いながら帰って行く

喜助 明ーけなば さーらに乗ーりかえてー さーんようどうをー すーす

まましー てーんきは あーすも 望みーありー やーなぎに かーすむ

つーきのかげー。

一彦 ……用事でもあるのかな？

とみ さあねえ……。

恵五郎 着替えてこよう。(と奥へ)

十子 あたしも。(と恵五郎に続く)

恵五郎を目で追っていた九里子、村松と目が合い、微笑みかける。

ゆっくりと暗転。

曇天の下の泉家。

井戸の脇の洗い場で、村松がタワシで桶を洗っている。

そこへ九里子が現れる。

九里子　こんにちは。なんだかすつきりしないお天気ですね。ひと雨降りそう。

村松　みなさん、お出掛けですよ。

九里子　そうですか。あ、それ、あたしも洗います。

九里子も桶を洗い始める。

九里子　村松さん、このひと月ですっかりお仕事に慣れたみたいですね。

村松　相変わらず、夜中は寝ています。

九里子　だってその証拠に、恵五郎さん、こうして安心してお留守を任せてらっしゃるじゃないですか。

村松　そうだといいんですが……。

九里子　そうに決まっていますよ。

村松　……僕なんかには仕事を任せなきゃならないほど、状況が厳しいのかもしれない。

九里子　状況って？

村松　練炭をバーナーに換えることすら苦しいってことです。

九里子　……そうなんですか？

村松　学校給食のような大口は、値段を下げないと取引が難しくなっているみたいですよ。おまけに、最近はこの辺りも下水道が完備されて、それに伴った水道料金が掛かる。

九里子 ……どうしたらいいんでしょう？

村松 住込みの従業員を雇う余裕は、もうないのかもしれませんが。

九里子 そんな……。

村松 手っ取り早いですからね。人件費の節約は。……ただ、それも応急処置でしかないとは思いますが……。

九里子 恵五郎さん、もやし屋をやめたりしないですよ？

村松 ……赤字を生むためだけの経営では、商売の意味がありません……。

九里子 あたし、困ります！

村松 ……。

九里子 ……あたしというか……うちの店が困ります……。

そこへ「ごめんください」という声とともに、かっちりとしたスーツに身を包んだ樋口八重（とみ・静子と三役）が姿を現す。

九里子 あ……。

八重 こちらは泉さんのお宅ですか？

村松 樋口……さん？

八重 ……。わたくしのことをご存じなんです。あなたは？

村松 この従業員で、村松です。

八重 村松さん。（九里子に）あなたは？

九里子 高野といいます。あたしは……ただのお手伝いです……。

八重 樋口八重です。（村松に）わたくしのことを、他にもなにか？

村松 先日、恵五郎さんとお見合いを……。

八重 他には？

村松 誠実な方をお探しだとか……。

八重 その理由も？

村松 ……男運がないと……。

九里子 村松さん！

八重 大変正確な情報です。借金まみれの博打打ちやら、大酒のみの浮気者  
にしか、これまで縁がありませんでした。

村松 あの、恵五郎さんでしたら、今、出かけていて……。

八重 結構です。突然で申し訳ないんですけど、もやしを見せていただけま  
せんでしょうか？

村松 もやし？

八重 ええ。こちらで作っていらっしやるとか。

村松 ……もやしを、ご覧になりいらしたんですか？

八重 そうです。お差支えがなければの話ですが。

村松 お差支えは……ありません。こちらです。どうぞ。

村松、八重を小屋に案内すると、すぐに一人で戻ってくる。

九里子 どういうことでしょうか？

村松 わかりません。一人にしてくれて。

九里子 本当に、静子さんにそっくり……。

村松 お見合いで居眠りされたことに腹を立てて仕返しにきたんでし  
ょうか？ だったら一人にさせちゃまずいなあ。

九里子 やっぱり、恵五郎さんと結婚する気になったとか……。

村松 それで現場の視察に？

九里子 他に考えられますか？

村松 うーん……。

八重が小屋から出てくる。

八重 ずいぶん蒸し暑いところなんですネ。

村松 もやしには最適なんです。ゴキブリがいませんでしたか？

八重 ……気づきませんでした。なにしろ暗くて。

村松 よく出るんですよ。たまにネズミとか。

八重 そうですね。

村松 あんなどころで長時間、長靴を履いていますから、足が臭くなります。

水仕事なので、すごく手も荒れますし。

八重 大変なお仕事のようですね。

村松 ええ。夜中も働きづめで寝る暇ありませんし。

八重 よくお体が持ちますね。

村松 僕は寝ていますが……。

八重 そうですね。

村松 おまけにまったく儲かりません。こんなうちに嫁いできたら大変です。

八重 ……なにか、誤解なさっているんじゃないやありません？

村松 え？

八重 わたくし、本当にもやしを拝見しに来ただけですから。お忙しいところ、ありがとうございます。

九里子 あの……！

八重 はい？

九里子 いかがでしたか？ もやしをご覧になって。

八重 ものすごく期待してきましたが……正直、それほど。

村松 期待？

八重 泉さんがおっしゃっていたんです。もやしは、天候に影響されず、町なかの小さな狭い場所でも短期間に育てることができる。だから、都心の人たちにも、新鮮な野菜を安定供給できるよう広まった素晴らしい食べ物だ。安くておいしい食事のためにぐんぐん育つもやしを見てみると、イヤなことなんてきれいさっぱり忘れると伺ったものですから。

村松 忘れたい、イヤなことがおありなんですか？

八重 ええ。女性が男性と対等に働こうとすれば、それはもううんざりするほど。

九里子 忘れられませんでしたか？

八重 残念ながら。

九里子 そうですか……。

八重 あなたは？

九里子 はい？

八重 高野さんでしたね。あなたには、もやしの素晴らしさがおわかりになる？

九里子 あたしは……おいしいなって思う程度で、素晴らしさなんてわかりませんし、恵五郎さんがどうしてあれほどもやしを大事にできるのかもわかりません。でも……。

八重 でも？

九里子 ……恵五郎さん……泉さんが、どれほどもやしのことを大事に思っているのかは、わかっているつもりです……。

八重 ……お邪魔いたしました。どうぞお仕事にお戻りください。

村松 なんのお構いもしませんで。

八重 (帰ろうとして、ふと) あとから聞いたことですが、わたくしのこの顔、泉さんの亡くなった奥様にそっくりだそうですね。

村松 僕らは、奥さんのことはよく知らないんですが……。

八重 迷惑な話です。

村松 はあ……。

八重 わたくしにも、亡くなられた奥様にも。

村松 それはまあ……そうかもしれませぬね。

八重 ……泉さんは、ずっと居眠りなさっていました。

村松 伺っています。

八重 たまに目を開けてもやしの話をなさる時も、わたくしの顔を見ないよ  
うに見ないようになさっていました。

村松 それは……初めて伺いました。

八重 ……誠実な方だと思いました。

間。

八重 残念です。わたくしは本当に男運がなくて。

村松 ……あの……室の中で、なにか聞こえませんでしたか？

八重 はい？

村松 聞いているうちに、なんだかこう、少しだけ気持ちが悪くなるような

……とても小さな音なんですけど……。

八重 いいえ、なにも。本当にありがとうございました。失礼いたします。

凛々しく帰っていく八重の後ろ姿を見送る村松と九里子。

九里子 (空を見上げ) あ……雨。

慌てて桶を片付け始める二人。

そこへ電話が鳴る。

村松 (桶を運びながら) すみません、九里子さん。出ていただけますか？

九里子 はい！

九里子、茶の間にあがって受話器を取る。

九里子 はい、泉商店です。……ああ、町内会長さん。九里子です。今、ち

よっとお留守番を……ええ。……はい。……え？

村松、軒下に駆け込んできて、雨の雫を払う。

九里子 ……え……だって……。ええ？

村松 (九里子の様子がおかしいのに気づいて) どうしました？

九里子 （受話器を押さえ、呆然と） ……喜助さんが……。

雨の音。

暗転。

七

暗闇の中で、帽子をかぶり、長靴を履いた若き日の恵五郎がしゃがみこんでいる。

暗闇の奥から、喜助が姿を現す。

喜助 水遣り終わった？

恵五郎 （ふてくされた様子で）終わったよ。

喜助 ……どうしたの？ 恵ちゃん。

恵五郎 なんだか馬鹿馬鹿しくなっちゃってさ。なんでもやしの生活に合わせるとこんな苦労しなきゃならないんだよ。

喜助 こうやって面倒見てあげなきゃ、もやしは大きくなれないんだもの。

恵五郎 なんで俺、店を継ぐなんて言っちゃったのかなあ。他にやりたいこといっぱいあったのに。大体、こんなに蒸し暑いところでこんなに長靴履いてたら、足が臭くなっちゃうよ。

喜助 もやしが嫌いになっちゃったの？

恵五郎 もうイヤだよ。もやし作りなんて。

喜助 ……恵ちゃん、こっちきてごらん。

恵五郎 なに？

辺りが闇に包まれ、その中から「鉄道唱歌」をゆっくりと奏でるギタ

ーの音が聞こえてくる。

夜。泉家の茶の間では、恵五郎が一人、ギターを弾いている。

そこへ喪服姿の一彦と村松が帰って来る。

恵五郎 おかえり。

一彦 「てっきり眠ってるのかと思った」って言ってたよ、公園で最初に見つけた人。まったく喜助さんらしいよな。

恵五郎 誰かを待ってたのかな。

一彦 さあねえ。

村松 (恵五郎に) 礼服、お借りしてしまってますみませんでした。

恵五郎 いいんだ。水遣りがあったし、俺は明日の葬儀の方に出るから。一彦、手紙来てるぞ。

一彦 どこから？

恵五郎 なんとか株式会社。

一彦 (ちゃぶ台の上にあった手紙を開封し、中身に目を通して) ちえっ。

村松 なんでした？

一彦 (手紙を見せて) 「内定を通知す」。

村松 ああ、おめでとうございます。

一彦 ……なんだよ、よりによってこんな日に。デリカシーに欠けるねえ。姉ちゃんとおんなじだ。

恵五郎 ちゃんと大学卒業しろよ？

一彦 ……。村松さん、飲みに行こうよ！

村松 え？

一彦 送別会だよ。さらば喜助さん！さらば、我が青春時代！

村松 え…でも…。

恵五郎 行っておいでよ。

村松 じゃあ、着替えてから。

一彦 いいよ、そのままです。俺ひとり喪服じゃカッコ悪いじゃん。

村松 一彦さんも着替えればいいじゃないですか。

一彦 だって悲しいお別れ会よ？ いいんだよ、この格好の方が。いいよね？  
兄ちゃん。

村松 ですけど……。

恵五郎 いいよ。行っておいで。

一彦 ……。俺さ、兄ちゃんみたいにはなりたくないって思ってたんだ。

村松 ……なにを言い出すんですか、藪から棒に。

一彦 ほんとだよ。ずっと思ってた。大学もあきらめて親父の跡継いで、寝る暇もなくもやしの世話ばかりしてる兄ちゃんみたいな人生は真っ平だ  
って。

村松 一彦さん、もう酔っ払ってるんじゃないか……。

恵五郎 知ってるよ。

一彦 ……知ってたか。

恵五郎 うん、知ってたよ。おまえ、寝言でも言ってたし。

一彦 そうか……。

村松 一彦さん、それはあんまりんじゃないですか？ 恵五郎さんが一彦  
さんや十子さんのためにどれだけ……。

一彦 だからさ、そういう誰かの犠牲になる生き方なんて、俺にはできない  
なって。

恵五郎 やらなきやいいさ。

一彦 だからってサラリーマンになるのも気がすまなくてなあ。

村松 だけど、こうして内定も貰えたわけだし……。

一彦 命令通り歯車になって働いてれば、生活は保証される。兄ちゃんの代  
わりに、今度は会社が守ってくれるってわけだ。それってどうなの？

恵五郎 だったらカメラマンでもなんでも目指せばいいだろう。

一彦 俺にそんな才能はない。

恵五郎 それぐらいの分別はあるんだなあ。

一彦 とにかく！ 俺は兄ちゃんみたいになりたくないの！

村松 一彦さん！

一彦 でも兄ちゃんには、今のままでいてほしいの！

村松 言ってること無茶苦茶ですよ！

一彦 ……もやし屋やめるなよ。

村松 え……？

一彦 俺はもう、もやしなんて食べ飽きてるからいいんだよ。けど、喜助さんが……。

惠五郎 ……一彦。

一彦 だって喜助さんは、もやしが好きだっただろ？

惠五郎 おまえ、いくつになった？

一彦 ……年男。

惠五郎 十二歳か。

一彦 掛ける倍だよ。

惠五郎 いつまで兄ちゃんに甘えてんだ。

村松 ……今のは、甘えていたんですか？

惠五郎 そうだよ。

村松 なんて複雑な甘え方なんだ……。

惠五郎 一彦は甘ったれの寂しがりでね。だから喜助さんは、誰よりもこいつを可愛がってたんだ。

一彦 幹太にとって代わられたけどね。

惠五郎 ……やめないよ。

惠五郎、ギターの弦を爪弾く。

惠五郎 やめないよ、もやし屋。せめて幹太が大きくなるまではね。……だ

から一彦は新しい場所で、やりたいことやってみろ。

一彦 会社でやりたいことなんてないよ。

惠五郎 行ったこともないくせに。

一彦 就職した奴らを見てればわかるよ。あいつらはなにも考えてない。そうでなきや、あんな人殺しみたいに混んでる電車で毎日乗れるわけがないんだ。

恵五郎 満員電車に乗りたくないだけじゃないのか？

一彦 ……俺はさ、ずっと考えてたんだよ。

間。

一彦 どうして喜助さんはあんなふうになっちゃったのか、ずっと考えてたんだ。子どもを亡くしたせいだっつてのはわかる。それが戦争のせいだつてのもわかる……。そこから先なんだよ。でもみんな、あれは不幸な過去だったから忘れようって言うだろ？ なんでだよ？ じゃあそれができない人はどうすんだよ？ 忘れられなかった喜助さんが悪いのかよ！ わかんないよ！

恵五郎 わかるよ。

一彦 なにが！

恵五郎 おまえが、喜助さんを好きだったってことだけはわかる。

一彦 ……俺にはまだわからないんだ。だから、言われたことだけやるような仕事について、これ以上頭が悪くなるのは困る。

恵五郎 それは俺も困るなあ。

村松 じゃあ、就職はしないんですか？

一彦 するよ。兄ちゃんに今までの借りを返さなきゃならないからね。頼んで作った借りじゃないけど。

恵五郎 いよいよダメだったら、もやしを手伝ってくれればいいよ。

一彦 チクショー、絶対出世してやる！ 歯車になんかならないぞ。

村松 会社の中にだって、一彦さんが一彦さんらしくいられる場所がありませんよ、きつと。

一彦 村松さんとこの会社はどうなの？

村松 え？

一彦 自分らしくいられる場所があるの？

村松 それは……。

一彦 あるんなら入れて。

恵五郎 飲みに行くんじゃないのか？ 店、閉まっちゃうぞ？

一彦 じゃ、続きは飲み屋でゆっくりと。

恵五郎 つきあわせちゃって悪いね。松村さん。

村松 ……いいえ。

恵五郎 ……今、俺、ちゃんと名前言えた？

一彦 言えたよ。いつも通り「松村さん」で。

恵五郎 (半紙を見てから) 本当にごめん。いい加減、怒るよね？

村松 いいんです。

恵五郎 いや、よくないよ。

村松 いいですよ。「松村」で。

そこへ喪服姿の九里子がハンカチで鼻を押さえながら入ってくる。

一彦 あれ？ 他のみんなは？

九里子 まだお通夜のお手伝いを……。あたし、泣いてばかりで役に立たな

いから、荷物を持って帰るように言われて……。

一彦 これからお別れ会だけど、九里ちゃんも来る？

九里子 いいえ、あたしは。

一彦 じゃあ行ってくるね。

村松 ……いってきます。

九里子 いったらっしやい。お気をつけて。

一彦と村松、揃って出かけていく。

九里子 とても大勢の方がおみえになっていました。子どもたちもたくさん……。

恵五郎 喜助さん、人気者だったからね。

九里子 あの遺影、一彦さんが撮られた喜助さんの写真……つい先週のものですよ？ あたし、どうしてもまだ信じられなくて……。

恵五郎 ……九里子さん。

九里子 はい……。

恵五郎 もやし見に行こうか。

九里子 え？

恵五郎 ……うん、行こう。

九里子 恵五郎さん、あの……。

恵五郎 おいで。

恵五郎の後について、九里子も小屋に入っていくと、辺りの景色も小屋の中の闇に包み込まれるように暗くなる。

やがて、暗闇の中に恵五郎と九里子の姿が、ようやくそれとわかる明かりの中に現れる。

恵五郎 足元、気をつけてね。滑りやすいから。

九里子 あたし、室の中まで入ったのは初めてかもしれません。

恵五郎 あれ？ そうだった？

九里子 ええ。……本当に蒸し暑いですね。もやしが熱を出してるから？

恵五郎 十子が言うには、「運動部員の男子でいっぱい満員電車にいるよ  
うだ」って。

九里子 確かにそんな感じもします。

間。

九里子 ……静かですね。

恵五郎 うん。

九里子 ……？ なにか……音がします。

恵五郎 うん。もやしの音だ。

九里子 もやしの？

恵五郎 もやしが育っている音だよ。水を吸って、ひしめき合いながら大きくなっていく音が、こんなふうに聞こえるんだ。

九里子 もやしの、音……。

恵五郎 夜の方がね、よく聞こえる。これが聞きたくて、松村さんには夜中の水遣りを譲れなかった。

九里子 ……「村松さん」ですよ？

恵五郎 ……どうしても覚えられない。

九里子 ひっくり返すだけなのに。

恵五郎 だって彼、「松村」って顔してると思わない？

九里子 なんとも言えません……。

恵五郎 俺だけか……。

九里子 ……恵五郎さんはいつも、この音を聞いてらしたんですね。

恵五郎 そう、いつもね。家族が増えた時も、いなくなった時も、いつもいつもここにいて、この音を聞いてたな。

九里子 イヤなことも、きれいさっぱり忘れられる……。

恵五郎 ……話したことあったっけ？

九里子 いえ……。

恵五郎 最初はね、イヤだったんだ。こんな仕事。

九里子 え……？

恵五郎 大学にも行きたかったし、ギターの勉強もしたかったけど、親に泣きつかれて仕方なく始めたんだ。だから文句ばかり言ってたんだよ。…

…だけど喜助さんが、「歌ってるよ」って……。

九里子 歌ってる？

恵五郎 「恵ちゃんが一生懸命育ててくれるから、嬉しくてもやしが歌ってるんだよ」って。

九里子 ……そうですか……。

恵五郎 喜助さんがね……教えてくれたんだ。

もやしを育てるその闇が、ゆつくりと二人を包む。

## 八

泉家の茶の間。

恵五郎が手にした一枚の名刺を覗き込むようにしながら、十子、一彦、九里子、とみが身を乗り出している。

村松は少しうつむきがちに正座している。

恵五郎 (名刺を読む) 「株式会社、松村電器、専務取締役……松村幸雄<sup>さちお</sup>」。

村松 ……ユキオです。

恵五郎 ああ、ごめん。

一彦 松村電器って、あの松村電器？

とみ 一彦君、知ってるの？

一彦 就職希望者の憧れの的。超のつく一流企業だよ。

十子 冷凍冷蔵庫とか電気洗濯機とか電気炊飯器とか、オーブントースターとかクーラーとかカラーテレビとか……

一彦 いつまで続くんだよ。

十子 電気掃除機とか電気カーペットとか魔法瓶を作っている、あの松村電器？

村松 ……魔法瓶はうちじゃありません。

九里子 ……それで、本当のお名前は「松村」さんなんですか？

村松 そうなんです。

十子 本当につまらない嘘をついていたのね。

村松 逃げたかったんですよ、「松村」の名前から。この十年でみるみる大きくなってしまうた会社の看板を、僕には背負いきれない気がして。

一彦 俺がいつしよに背負ってあげてもいいけど。

とみ 恵五郎さんは間違っていないかったのね。

村松 (頷き) 何度言っても「松村松村」って。しつこく責められている気がしました。いつまでそうやって逃げ回っているんだって。

恵五郎 悪いことしたね。そんなつもりはこれっぽっちもなかったんだけど。

十子 ダメね、お兄ちゃん。悪気がないっていうのはね、一番タチが悪いのよ？

恵五郎 (やや驚いて) おまえに言われるとは思わなかったよ……。

とみ それで……いつお帰りに？

村松 明日……もやしの出荷が終わったら。

恵五郎 幹太が寂しがるよ。将棋の相手がいなくなって。

一彦 俺がいるだろ？

恵五郎 ……気を遣わずに、将棋を指せる相手がいなくなって。

九里子 どうして、帰ろうって思ったんですか？

村松 ……これ以上、両親や会社の人間を困らせるのも大人気ないし、それに……。

十子 ねえ、結婚式には是非出席して！ ご祝儀はね、オーブントースターでいいから！

一彦 (村松に) 悪気はないんだよ。一番タチが悪いんだ。

十子 いいでしょ？ 村松さん！

とみ 「松村さん」でしょう？

十子 いいわよね？ もうどっちだって。

村松 ええ。もう大丈夫です。どっちだって。

とみ (立ちあがり) それじゃあ今夜はごちそうを作らなきゃね。ほら、十

子ちゃん、手伝って！

十子 あたし、佐々木のおかあさんのちらし寿司が食べたい！

とみ あなたが食べたいもの作ってどうするの？

とみと十子は台所へ。

一彦 そうだそうだ！ 忘れないうちに。(と奥へ)

九里子 (腕を組んでうつむいている恵五郎に) 恵五郎さん……？

恵五郎 うん、起きてるよ。

九里子 まあ、珍しい。

村松 本当に申し訳ありません。突然辞めるなんて言い出して。

恵五郎 ……気を遣わせちゃったんじゃないのかな。

村松 え？

恵五郎 住込みの人ひとりぐらいは、まだなんとかなるんだけどね。

村松 ……でしたら是非、散水機を導入してください。

恵五郎 そうだな……。

村松 あまり無理をしないでください。

恵五郎 そっちこそ、慣れない仕事でつらかったらうに。

村松 ……工業機器を扱っているところなら、いくらでも知っています。

恵五郎 いろいろ心配もしてくれて。

村松 多少の融通もききます。

恵五郎 うれしかったよ。

村松 僕に出来ることがあったら。

恵五郎 ありがとう。

九里子 松村さんは、社長さんになるんですか？

村松 将来的には……多分……。

九里子 電化製品はこれからどんどん売れるでしょうし、松村さん、大変です  
ね。

村松 ……そんなことを言われると、また肩の荷が重くなります……。

恵五郎 きつと松村さんは、いい経営者になると思うよ。

九里子 あたしもそう思います。

村松 自信ないですよ。あのワンマンな父親と、一緒にやっつけていけるかどうか。

九里子 喧嘩になったら、お化けの話をすればいいんですよ。

村松 絶対イヤです！

恵五郎 なんだ、松村さん、お化けが怖いのか？

村松 いないものなんて怖くありません！ ……父のことだって、怖いとか嫌いってわけじゃないんです。ただ、父の猛烈な仕事ぶりや、熱気にあふれた社内の雰囲気、僕はついていけなかった……。新しく便利なことを理由にしたこの勢いが、もしかしたら、古いものをすべて壊していくんじゃないかって……空恐ろしい気がしてきて……。

恵五郎 松村さんはそんなことしないよ。

村松 どうでしょうか……。

恵五郎 だって、もやしの音が聞こえるんでしょ？

間。

恵五郎 あんな小さな音に耳を傾けられる人は、大事なものを無闇に壊したりなんてしないよ、きつと。

村松 ……。

九里子 みんながよろこぶいいものをたくさん作ってくださいね。

村松 (受け止めて) 頑張ります。……けど……。

九里子 けど？

村松 そんなに朗らかにお願いされたら「頑張ります」としか言えませんけど……難しい注文だな。……喜助さんは、気にも留めてくれませんでしたからね。

九里子 喜助さん？

村松 買物に誘われても、あっさり断ってた。……「売っているものしか買えないから」って。

九里子 あ、覚えてます。「もやし見てる方が楽しい」って。

村松 ……「買うに値するものなんか売っていない」。そう言われたような気がしました。

恵五郎 厳しいお客さんだ。

村松 だとしたら、これから本当にいいものを作っていくしかありません。じゃあいいものとはなんなのか、それを僕らは、いつでも問い続けなければならぬ。

恵五郎 骨が折れるね。

村松 (苦笑まじりに頷いて)世の中の人がみんな十子さんみたいだったら、商売も楽なんですけど。

恵五郎 世の中の人がみんな十子か……。

村松 ……ちよつと、賑やかですかね。

恵五郎 恐ろしく賑やかだろう……。

一彦 (一枚の写真を手に戻ってきて)ほら、村松さん！ ああ、松村さんか。ややっこしいな、もうユキオでいいや！

恵五郎 どうしてそこで呼び捨てになるんだ。

一彦 これ持っていきなよ。先月、九里ちゃんと撮った写真。(九里子に)九里ちゃんには今度、焼き増ししてあげるね。

恵五郎 (写真を見て)ずいぶんしょんぼりした顔で写ってるね。

一彦 俺の腕のせいじゃないからな。ほら、九里ちゃんはいいい顔で撮れてるだろ？

村松 ありがとうございます。いい記念になります。

九里子 この時の松村さん、可愛かったですよ。小さい子どもみたいで。

村松 ……。

九里子 ごめんなさい。失礼なこと言っちゃった……。

村松 いいんです。小さい子どもだったんです。

一彦 そうだ、記念写真撮ろうか？（恵五郎に）三脚どこだっけ？

恵五郎 （寝ている）

一彦 兄ちゃん！ 三脚は？

恵五郎 ……知らないよ。

一彦 ちょっと探してよ。

恵五郎 （立ちあがり）どうせ押入れかどっかだろ。（と奥へ）

一彦 あ！ 幹太がない！

九里子 あたし、公園まで呼びにいきます。（と外へ）

一彦 頼むね！ 姉ちゃん！ おばちゃん！ 写真撮るよ！（と台所へ）

一人残された村松、写真を見つめる。

暗転。

## 九

蝉の声。

十数年後の夏の泉家。

もやしの小屋は工事用のシートに覆われている。

茶の間の半紙が貼られていた場所には、男物のリクルートスーツが掛かっている。

背中がすっかり曲がって小さくなってしまったとみが繕い物をして  
いる。

そこへ電話が鳴り、奥の部屋から恵五郎が入ってくる。

恵五郎 （電話に出て）はい、泉商店です。ああ、こんにちは。……ええ、

そうなんです。長い間、ありがとうございます。引継ぎの業者は先日、ご主人の方に……。はい。

台所からエプロン姿の九里子が入ってくる。

恵五郎 わざわざご丁寧にどうも。はい、お店のみなさんにもどうぞよろしく。失礼します。(切る)

九里子 (とみに) おかあさん、もうじきお昼ごはんですよ。

とみ ありがとうございますね、静子。

恵五郎 九里子ですよ、お義母さん。

九里子 いいですよ。静子でも九里子でも、お好きな名前で呼んでいただければ。

上等なスーツに身を包んだ松村が庭に姿を現す。

松村 こんにちは。

恵五郎 やあ、ひさしぶり。

松村 近くまで来たものですから。とみさん、ご無沙汰しています。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

九里子 もうすぐ一彦さんもみえますよ？ よろしければ、お昼ごいっしょにいかがですか？

松村 すぐ戻らなければいけないですよ。

九里子 お忙しいんでしょう？ 社長さんともなれると。

松村 まだ副社長ですから。

ワイシャツにネクタイ姿の一彦が玄関から現れる。

一彦 なによ、外のあのでっかい車！（松村に気づき）ユキオさんか。

松村 どうですか？ お仕事の方は。

一彦 相変わらず本音と建前を使い分けろって怒られどおしだよ。もうすぐしじゅう四十になるってのにさ。

十子 (玄関から現れ) なあに？ あの立派な車！ あら、村松さん！ ちようどよかった。うち、電子レンジ買おうと思ってるんだけど、今、買い時？ もっといいのが安く出るかしら？

松村 さあ、その辺は僕にはちよつと。

一彦 「松村さん」だよ。世界の松村電器だぞ？

十子 (一彦に) あなた、外回りの度に実家でごはん食べるのやめなさい。

お家で多恵子さん、泣いてるわよ？

一彦 笑ってるよ、家の奥方様は。テレビ見ながらゲラゲラね。

十子 九里ちゃんだって迷惑でしょ？

九里子 たいしたものありませんから。

恵五郎 (十子に) おまえはなにしに来たんだ？

十子 佐々木のおかあさん、こんにちは。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

十子 あたしよ、おかあさん。

とみ あら、十子ちゃん。お嬢ちゃんの浴衣、出来ていますよ。

十子 ありがとうございます。下の子の方も？

一彦 どっちが迷惑だよ。

松村 (シートに囲まれた小屋を見て) お店、とうとう畳まれるんですね。

恵五郎 あの小屋ももう寿命だね。湿気で柱がダメになってた。

松村 残念ですね。

九里子 近頃、よそでもやしを買ったりしますけど、やっぱりね、あんなに  
おいしくないですよ。

恵五郎 散水機とか梱包の機材とか、松村さんにはいろいろお世話になった  
のに申し訳ないね。

松村 いいえ、たいしたお力にもなれなくて。

恵五郎 知り合いのもやし屋を手伝うことにしたよ。水撒きも温度管理も機械がやってくれる、大きいところだけだね。

一彦 兄ちゃんは結局、一生もやし屋か。

十子 ねえ、幹太は？ 就職、決まったの？

九里子 まだなんですよ。やっぱりミュージシャンになりたいなんて言い出して。

一彦 わかるなあ。学生最後の夏休みを、こんなスーツ着て会社なんか回ってられるかっていうんだよ。

恵五郎 余計なこと吹きこむなよ？

松村 よかったら、うちも受けるように言ってくださいよ。来年は新卒の枠を大きく増やしていますから。

十子 あら！ 社長のお墨付き？ いいじゃない！

松村 まだ副社長ですけど。

小屋の方から、取り壊しの始まる音。

とみ以外の全員が、一瞬、その音に意識を向ける。

恵五郎 ……始まったな。

松村 (腕時計を見て) もう時間だ。それじゃあ、僕はこれで。

九里子 いつでもいらしてくださいね。

恵五郎 待ってるよ。

十子 今度うちにも遊びに来て？ 冷蔵庫の調子がおかしいのよ。

一彦 そんなこと副社長に頼むなよ。

松村 (とみに聞こえるように) とみさん、失礼します。

とみ ……あら。村松さん？

松村 そうですよ。

とみ まあまあ、ずいぶんご立派になられて。

松村 また来ますからね。

とみ （独り言のように）……みーんな変わってしまったわねえ……。

松村 それではみなさん……、

とみ （やはり独り言のように）変わらないでも、よかったのにねえ……。

間。小屋のシーートの向こうからは、立て壊しの音。

一彦 ……そうかもね。

玄関の扉が開く音に続いて元気な青年の声。

幹太 （声だけ）ねー！ 外のあのでっかい車なにー？

恵五郎 こら幹太！ 帰ってきたら「ただいま」だろ。

十子 （松村に）もうね、図体ばかり大きくなっちゃって。

松村 じゃあ顔だけ見ていこうかな。

一彦 （玄関の方に向かって）オイ、なんだよおまえ、ミュージシャンになりたいたって？

九里子 （とみに）さあおかあさん。お昼ごはんにしましょうね。

工事の続く音。セミの声。

和やかな表情の人々に、ゆっくりと幕が降りてくる。

終